

English Garden 第41話

"I happy am,
Joy is my name."
William Blake

「あたいは楽しい、
よろこびがあたいの名」
ウィリアム・ブレイク

前回に続き、ウィリアム・ブレイクの作品で、詩集 "Songs of Innocence" (無心の歌) から "Infant Joy" (幼い喜び) の一部です。次のような愛らしい詩です。(土居光知訳)

"I have no name; am but two days old." What shall I call thee? "I happy am, Joy is my name." Sweet joy befall thee!	「まだ名がない 生まれて たった二日、 では おまえを何とよぼう？ 「あたいは楽しい よろこび があたいの名」 ゆかしいよろこびよ おまえの上にあれ！
--	--

Pretty Joy! Sweet Joy, but two days old, Sweet Joy I call thee: Thou dost smile, sing the while, Sweet Joy befall thee!	かわいいよろこび 生まれてたった二日の ゆかしいよろこび ゆかしいよろこび とおまえをよぼう おまえは笑み わたしはうたう ゆかしいよろこびよ おまえの上にあれ！
--	--

生まれたばかりの生命に対する愛情がほとばしり出たような、やさしい歌です。「無心の歌」に収められている詩は、子羊・羊飼いの春・花・子守歌などのタイトルが示すように、汚れのない、無垢の世界が主題になっており、生きているものがすべて生命の喜びを謳歌しています。そして詩人は、親が子どもの嘆きや苦しみを慰め、涙を拭いてやるように、神はいつもそばにいて悲しみを取り除いて下さることを教えています。("On Another's Sorrow")

ブレイクは1757年、ロンドンの靴下商人の子として生まれました。そのころロンドンにはまだ豊かな自然が残っていて、野原や森で自由に遊ぶことができました。ブレイクは幼いときから幻想を見るような少年で、大勢の天使が村人と一緒にいるのを見たとか、野原に予言者エゼキエルの姿が見えたとかいうような話がたくさん残っています。そうした傾向に父は悩み、学校に行けば教師や同級生のあざけりを受けて危険であると考え、家庭で教育をすることにしました。彼が次第に美術に才能を現わすのを見て10歳の時から画塾に通わせ、自宅でも練習できるようにと、ヘラクレスやヴィーナスなどの石膏像を買い与えたということです。

1772年、ブレイクは15歳の時、古代の遺物の彫版を扱うパザリアという銅版画師に弟子入りし、硬質の線を中心とする精緻な銅版画の技法を学びはじめました。やがてウエストミンスター寺院に派遣されて、古いゴシックの墓碑を模写することになり、エドワード懺悔王の御堂に安置された諸王の記念像を克明に描きました。その御堂の中では過去と現在が溶け合い、「彼自身もほとんど一個のゴシック彫像となって鉛筆を動かした」とある伝記記者は伝えています。そのころにはもう詩作も始めており、銅版画と詩を合わせたブレイク独特の世界が広がられていくのです。

1787年に、愛する弟ロバートが19歳の若さで病没し、ブレイクに大きな影響を与えました。一つは、ロバートの霊が両手を打ちながら昇天していくヴィジョンを見て 霊的な世界の存在を確信するようになったこと、もう一つは、ロバートの霊を通して、彩飾版画という独特の銅版画法の着想を得たことです。

1789年には、彩飾版画の最初の作品として「自然宗教は存在しない」「すべての宗教は一つである」が制作され、それから「天国と地獄の結婚」「アルピオンの娘たちの幻視」などが次々と制作されました。ここにとりあげた「無心の歌」の制作年代は1789年ですが、「経験の歌」との合本の形では1794年に出されています。

